

## 新人弁理士の戸惑い



鈴木 一 永 (無名会)

私が弁理士になってから1年が経とうとしています。日々の仕事・行事に追われて気が付くとあっという間の1年でした。文書を書く機会が与えられたのでこの一年で気になったことを書いてみたいと思います。

第一にびっくりしたことは、多くの先輩弁理士を見てとにかくよく勉強していることです。弁理士は日々の技術革新等に対応するために日々の勉強が必要なことはある程度予想していましたが、これ程とは思いませんでした。総ての研修等に参加していると、日々の仕事さえできなくなってしまいそうです。諸先輩はどうやって、仕事と勉強を両立させ、且つ、遊び回ることができるのか不思議でなりません。ただ、効率よく勉強したりするために、各会派に属しその人脈を利用することが有効であるようです。弁理士の各会派はこんな理由からもこの存在意義があるのかもしれません。一日も早く一人前の弁理士として自信をもって代理・相談等ができるようになるためには、いずれかの会派に所属する事が近道かもしれません。

第二に気になったことは、日本弁理士会自体及び各会派更にはそれら相互の関係が全くわからないことです。日本弁理士クラブに至っては、諸先輩から説明を聞いても今一つピンと来ません。一応の説明は言葉としてわかるのですが、実際に、弁理士の現在があるのは、日本弁理士会があったからとも言えませんが、弁理士の社会的な地位や社会的な役割を日本中に広めるためには、日本弁理士会はなくてはならない組織です。更に、各会派となればどんな存

在意義があるのかよくわかりません。但し、実際問題として、現在の日本弁理士会が行っている様々な委員会運営等を日本弁理士クラブが中心となって下支えしていることも事実なのだそうです。本来各弁理士が自ら自発的に自治組織である日本弁理士会を運営し、自らそれをチェックし、自らそれを支えて行けるのであれば、各会派は本来の親睦・研修のための任意団体で良いのでしょうか、実際はそうでもないようです。自治組織の運営をする際には、各構成員が個人としてはやりたくないことも多々あるようで、各自の自主性のみで依拠すると、必要なのに動かない委員会等ができてしまい、場合によっては、自治組織の体をなさなくなってしまうこともあるのだそうです。弁理士としての権利は取りあえず享受して、その権利を守ることは人任せにするのでは、知財戦略の担い手を標榜する弁理士として寂しい気もします。同業者が大幅に増員される昨今、この「いいとこどり」が横行すると、結局は弁理士全体にも暗い影を落とすようになるようで不安です。

最後に、この記事を読んでくれた新人弁理士の方がいたら、まずは仕事を覚えて一人前の弁理士になるため忙しい日々を過ごしている中でも、日本弁理士会のために、又はいずれかの会派のために時間を割いてみてください。そのように時間を割いたことは、必ずやあなたのためになると思いますし、そういった自発的な活動が弁理士とその自治組織である日本弁理士会の未来を切り開くことになると思っています。かく言う私も、そう信じてこの原稿を書いているわけです。